

人間学研究所開設20周年記念公開イベント

『学際的研究の魅力と課題』

実施報告

小林 康正

2016年に京都文教大学は開学20周年を迎え、開学とともに始まった人間学研究所の活動も20年目を迎えることとなった。これもひとえに関係各位のご支援ご厚情の賜物であり、深く感謝を申し上げる次第である。

本誌では、大学の開学20周年記念式典が行われた2016年10月1日(土)にあわせて、キャンパスプラザ京都にて実施した「人間学研究所開設20周年記念公開イベント：学際的研究の魅力と課題」での内容の一部を収録している。

また今回の事業の一環として、これまでの人間学研究所の活動を振り返る記念冊子『人間学研究所 20年のあゆみ』を発行した。今回の公開イベントにおける小林の基調講演は、主にこの冊子制作の過程で感じ得たことをもとに構成している。

また今年度の担当所員として山崎晶先生(本学総合社会学科准教授)からは、今回のイベントを前に本学の教職員にむけて実施した「共同研究のあり方に関するアンケート」の集計結果を報告いただき、その内容も本誌に収録した。

同じく所員として登壇いただいた名取琢自先生(本学臨床心理学科教授)は、開学当時の大学を知る教員の立場から、文化人類学科と臨床心理学科というふたつの学科でスタートした本学での研究活動の可能性に胸を躍らせていたことを述懐した。そして現在においても失われていないその想いを、日本書紀の『古事記』を題材に、独神(ひとりがみ)の時代から男女の神の関係性において新たな神が生まれる話になぞらえ、学際的共同研究を育むことの意義を語っていただいた。

また本イベントでは、かつて助手の立場で人間学研究所および本学の創設期に尽力いただい

た2名の先生方にもご登場をお願いした。トム・ギル先生(明治学院大学国際学部教授)は、初代所長の別府春海先生のもとではじまった人間学研究所の活動を側で支えた一人として、例えばそれぞれの学科の教員のキャラクターや個性が反映されていた当時の共同研究の様子や、別府先生との思い出などをユーモアを交えてお話いただいた。また中山紀子先生(中部大学国際関係学部教授)からは、現在の本務校における特別研究費制度や共同研究組織のあり方を中心にお話いただいた。特に国際学科において近年取り組んでいる「ハイブリッド・プロジェクト」と呼ぶ、異なる専門分野の教員が複数人同時に参加してプロジェクト型授業を展開する試みについては、共同研究と教育の双方への波及効果という可能性を考えるうえで示唆に富むものであった。

そして本イベントでは懐古的な話だけでなく、できるだけ外部からの一般来場者にも興味を持ってもらえる内容にしたいと考え、人間学研究所で行ったイベントの広報チラシの多くを制作した本学事務局研究支援課の立石尚史さんによる「プチ・セミナー」として、デザインの発想法や、学術イベントの魅力をアピールするためのアイデアや技法を解説するレクチャーも実施した。

この日は学内の教職員24名、そして元教員や卒業生、他大学の職員や一般参加として27名の合計51名の来場者があった。外部からの参加者の方が寄せてくださったアンケートの感想文には「教職員の“思い”によって大学は支えられているという当たり前のことに気づかされました」とあり、本学が有するポテンシャルを掘り起こし活性化させるためのあり方を考えていく

場としての研究所の存在を改めて認識できる機会となった。

そしてスタンフォード大学名誉教授として現在カリフォルニアにお住まいの初代所長別府春海先生からは、20周年に際してのメッセージを寄せていただき、イベント当日に紹介をさせていただいた。さらにその後、けい夫人を伴って

来日される機会を得られ、10月28日に本学を訪問していただくこととなった。平岡聡学長をはじめとして当時を知る教員有志で歓迎会を行い、別府先生の変わらぬ笑顔を囲み、懐かしい話が尽きない時間を共にすることができた。このことも含めて人間学研究所の開設20周年記念事業の報告とさせていただき、あらためて関係各位に深い感謝の意を表したい。



20周年記念イベントチラシ



会場の様子



トム・ギル先生



中山紀子先生



2016年10月28日、別府春海先生ご夫妻を囲んで